



七〇年代の雨

高村昌憲

目次

詩集 七〇年代の雨 目次

I

ポピーの花
残像
新宿の夜
七〇年代の雨
再会（I）
再会（II）
ベトナム戦争
高校生
少子化哀歌
第九条
高ぶる者へ
二つの地球
蝸たち
神さまを信じたい

II

裸のリンゴ
南仏へ
山へ
顔
キーボード
最期の言葉
宇宙を描く時刻
日の出に

III

再生
革命家のように

新緑

四月の誓い

結婚

高遠の空

手紙

尊敬へのアイロニー

五月の祭り

青く澄んだ湖

退職

笑顔

献杯

あとがき

略歴

ポピーの花

一九六八年五月に咲いていた
ポピーの花は八月のように黄色い
記憶を閉じ込めた二日酔の歌
思いがあるから流れは果敢無はかない

外出するときはずっとひとり
今も意志を置き忘れた机の上
どこへ消えたのか連帯の香り
無花果いちじくになって聞いた黄色い声

通学途中の街角が催涙弾に汚れ
いじらしかった雀らの消えた歌声
学生も機動隊員も二十歳台の群れ
スキップした残像からは歪んだ口笛

腿が眩しい流行のミニスカートと
男の長髪が染色体に染みついていた
歩行者天国を進めばそこは思い出の古都
いつのまにか残像は時代遅れのスーツ姿

新宿の夜

列を組んで学生は逃げ 警官が追う
列を離れて反撃のために線路へ降りる
国電は止まり 路床の石が宙を舞う
遠い十・二一国際反戦デーの新宿の夜

それを思いついた者の名を私は知らない
全共闘世代は犠牲者にも成れない匿名世代
ヘルメットとタオルの顔しか分からない
もう覆面は止めて 今は素顔の意志に乾杯！

七〇年代の雨

いつも好きな人が霧の中にけむる未熟な愛
自分だらけの雫に濡れた気儘な連帯だった
デモとストライキでびしょ濡れの七〇年代
それでも醒めた今よりも他人ひとに酷ひどくはなかった

ポケットに仕舞い込んでいただけの革命
ノンポリの青年たちも狙っていた台風の目
傘をさしながら並木道に落とした七〇年代
今よりも自由に快活に跳ねていた 時代の雨

再 会（I）

細長い緑色が眩しいサフランの葉
三十三年目の秋に生れた約束の出会い
日の光を独り占めにしなかった自称左派
北海道から渡ってきた一陣の風との再会

七十年代の若者も集団の司会者になり
壇上のセレモニーも予定通りに終った
南の国へ帰る渡り鳥のように季節を守り
友との再会が新しい過去を作ってくれた

再 会（Ⅱ）

あの時代の戦争は既に終わっていたが
三十三年振りに語りかける友の声からは
魚類の血液のように流れる生臭い自我
あるいは地上をゆっくりと這う爬虫類の皮

友よ！ 私たちは生きて今日まで守ってきた
七十年代を呼吸していた思考と行動の年輪を
狂気の商人が誘った消費の指示は本の葉にした
お互いが自由に描こうとしていたのは自らの顔

ベトナム戦争

「ベトナムで人が殺されていても
本ばかり読んでお前は何もしないのか？」
それが戦争に加担するのと同じであっても
何もしないことが本当に殺人者なのだろうか？

揺れる赤いポピーの花を愛せない男が
遠い遠いベトナムを何故愛せただろう？
アフガンと湾岸の時も何もしなかった男だが
イラクで加担した骨無しだけは赦さないだろう

高校生

パリ市内では高校生がデモをして
雇用されて二年以内に理由もなく
首を切られても良い法律を拒否して
失業の不安を吸収して正義の花が咲く

空には同じ風が流れている筈なのに
あの順法闘争の逆説を知らない高校生
マネーゲームと談合社会でできた竜巻に
不公平な列島の天気図も描けない青い性

少子化哀歌

平和主義より競争だ 競争だ
ライバルに負けずに働け 働け
サラリーマンは戦略だ 戦略だ
世界一を目指し海外へ行け 行け

改革のための改革で疲れた 疲れた
明日も明後日あさっても休めない 休めない

ひとり 心も貧しく瘦せた 瘦せた
女性であっても産めない 産めない

第九条

変えたい者は現実派
変えたくない者は理想派
現実理想に向かう方法
理想は現実を超える目標

方法は方法として語れば良い
目標は目標として考えれば良い
何よりも不健全なのは語らないこと
醜悪なのは自分自身で考えないこと

高ぶる者へ

浅薄に高ぶる者は気付かない
間違った判断と私欲の不公平に暮れ
貴族主義を溺愛した短絡な独断と命令
やがては尊敬と公正を失うことを知れ！

偉そうに愚鈍に高ぶる者は
せいぜい小集団の親方として去れ！
正義と公平を守る指導者の資格には
不適格であり不遜であることを知れ！

二つの地球

海と山が続く地球が二つあれば良い
一つの地球にはアメリカと世界の軍人たち
武力無しでは世界の平和が語れない
国旗と国歌で幼稚に踊る全体主義者たち

別の銀河にあるもう一つの地球には
半径三メートルの仕事を愛する労働者たち
国家や郷土よりも義務を忘れない額の皺
美しい海と山と大空を求める芸術家たち

蛸たち

私を生んでくれて
育ててくれた母のように
私の手を引いてくれて
外へ連れ出してくれた父のように

日本の国を作り直してくれて
まとめてくれたマツカーサーのように
日本人を従順な人間にしてくれて
社会秩序と平安に貢献している天皇のように

日本人には運命の服従の糸に
操られる染色体が染み込んでいて
一人では何も決められずにいるのに
我儘で 思い思いの蝸壺が好きな自由リベルテ

そのくせ新聞や本に書こうとすれば
いつも自分のスミで黒く塗りつぶして
テレビに映された自分の顔を見れば
虚栄心の重みで平らにつぶれている平等エガリテ

日本人の言葉は八本足のようになって
まあ そうかな そのうち 考えて置くよ.....
色々あって承諾も不承諾も分からなくなって
百五十年の眠りから醒めることが無い蝸たちよ！

神さまを信じたい

分からないことって一杯あるね
百四十二億光年の先の先に何があるのかね

あなたとぼくがいる世界のことが分からない
やはり夜空と言う空間があるのか分からない

分からないことを神さまって言うの？

∧無限∨と言ってはいけないの

見えないものを神さまって言うの？

∧透明∨と言ってはいけないの

まるい円の上を歩けば無限

歩くのを止めれば無限でなくなる

1、2、3……と数えていけば無限

数えるのを止めれば無限でなくなる

見えないものならこの世にも沢山ある

あなたの声と心も見えないから透明

見えない声と心にぼくはおびえている

寄付金を出せ 票を入れろ 命があぶない

神さまにお金はいらない

神さまは選挙に立たない

神さまは平和についても語らない

ぼくは神さまを信じたい

II

裸のリンゴ

没後百年のポール・セザンヌの町へ行く
故郷の風景を描き アトリエに静物を並べる
パリのサロンへ出品しても何年も落選が続く
虚栄心が落ちる 功名心が洋梨のように腐る

南仏の青空は現代人の心の純度を上げる
埃っぽい都会の中で染み着いた他人の視線
サント・ヴィクトワール山が純白の肌着をくれる
リンゴが裸になる 丘の上で見た純粹の時間

南仏へ

パリを出ると景色以外は 何もない
国家が無くなったような 町の歴史
青い六月の空に平原の地平線が快い
サント・ヴィクトワール山の白い石

セザンヌが描いた 優しい風景が坐る
サロンへの出品は落選が記念碑の絵画
リングは腐る寸前に色彩を発酵させる
僅かな時間を焼き付けた永遠の静物画

山 へ

十八歳のときに信州の山を出て
あなたが見たのはアメリカ大陸
残したかったのは真のリベルテ
あるいは教壇の上のアルカイック

満州の大地に生まれ五歳になって
あなたが歌っている伊那谷の砂時計
つつましく落下する美しきアンダンテ
蝉がいて蝶が必然になった詩人の風景

顔

ジャンパー姿がどこか不似合い
革命運動当時のザンバラ髪
ベレー帽のなかに隠された闇
あなたが今 美しく育てているのは古い

それでも別れ際に ふっと
一言洩らした 重い言葉
歳をとるのは辛い！ と聞けば
わたしは希う あさの光のサイレント

亡き妻を歌ったオルフェよ
あなたの生命いのちは新しい
山に登り 川へ釣り糸の憩い
そんな時が 今を美しくせよ

退学の代わりに身に付けたフランス語
あなたが訳された日本語には
外界へむかう力強い足音の平和
あなたの目は抉る 政治家の午後

あなたは澄んだ白磁の器になる
あなたは私たちにも見えてくる
あなたの声は 秋の日の光に映る
あなたの顔は あなたのものでなくなる

キーボード

未刊詩篇を探し回っていた夜更けに
ネットワークの奥から故人の声が聞こえる
未刊詩篇をパソコンへ入力している時に
詩人の顔が見えてきて 対話が始まる

思えば 詩人として何でも知っていて
無知だった私の耳元に囁き始める
この世で本当に大切な言葉が実って
ピアノで伴奏するように歌ってくれる

戦争の後始末に苦しむ世代の人々がいた
戦争を準備する人々から疎外されても
僅かばかりの年金で口を封じられても
月と温泉と酒に酔っていた訳ではなかった

キーボードを叩くと闇の中が見えてくる
朝鮮人の恨ハンの心を理解している顔だった
植物公園で笑っている顔には桜吹雪の春
三八度線を生んだ悲劇と一緒に飲んでいた

今の光は過去の光 過去の光は未来の光
半島に咲く花々から無意味な諍いは消えろ！

正確なキーボードが拾う 未来の言葉の森
暗闇を活字にして遠い星雲の星たちを見ろ！

最期の言葉

ひとりで月を見て好きな人を思い出すように
あなたは焼酎よりも八菊正宗Vの熱燗が好きだった
花には団子もかかせないのが主義だったように
年に一度のお花見にはだだちゃ豆かそら豆だった

心臓が停止して電気ショックで蘇生した時も
あなたは笑って楽しみが一杯詰まった命と遊んでいた
火傷が残る弱った心臓にペースメーカーを埋め込んだ時も
慌てて携帯の電源を切ると構わないよとあなたはおっしゃった

最近のフランス製のペースメーカーは優秀で
すこし離れていれば悪影響は無いとあなたはおっしゃった
まるでそれは 背中ばかり見せているようなあなたは詩人で
フランス語ばかりやっているどら息子の私と似た関係だった

南仏から投函した絵葉書をあなたは聞いてくれた
枕元で読むと白い眼を開けたと奥様はおっしゃった

「詩も書いて下さい」と何時かあなたはおっしゃった
受話器で聞いた私にとっての大切な最期の言葉となった

いつまでも懐かしい日本の童謡を愛したように
あなたは若い詩人たちには学校の先生のように親切だった
部屋の中を歩いて声を出して創作した四行詩のように
八十二年余りの人生は二〇〇六年六月二十一日に完成した

宇宙を描く時刻

九四歳まで宇宙を描き続けた画家は
岩絵具を塗った作品の前に布団を敷いて
そこで睡眠をとって創ったこともあるという
そのくらいに作品と長い時間係わらないと
宇宙を描いた秀作が生れないらしい
言葉を越えた良い作品が創れないらしい

学校の先生も生徒という作品と係わるには
宇宙を描いた心と心の触れ合う時間が長くて
言葉を越えた親密な関係が必要に違いない
それなのに絵具で実際に両手を染めていない
財界の社長や国家主義の政治家や官僚たちは

抽象された計画や短絡な成果ばかり要求するから
数字と文字を羅列した文書ばかり求めるから
缶ビールを売るように学校も競争せよと言うから
先生も生徒集めに奔走しなければならないから
授業以外に先生は忙しくて 哀れで 辛いから
とても生徒の前に布団を敷いて寝る時間が無い

無神経な電卓とパソコンを駆使して
社長や政治家や官僚たちが喜びそうな
計画書や報告書を沢山書いた挙句に
生徒の真の成長を見ずに自己満足に陥った父母へ
気に入りそうな文書まで作らなくてはならなくなって
その分だけ生徒の顔がだんだんと遠くなって
ビデオテープを流しているような授業になって
生徒は学習塾へ行かないと入試に合格しなくなって
そのせいもあって学校の先生が尊敬されなくなって
誰も宇宙を描いたり理解することができなくなった

良い教育とは動き続ける宇宙を感じて
数字と文字を超えて先生と生徒が理解する宇宙で
交信し合う時間を長く 長く持つことなのに
社長や政治家や官僚たちも学校に宇宙を置いて
見守って待つ時間が大切なはずなのに
何故か生徒と交信できない先生を創ろうとする
何故か宇宙を知らない生徒を創ろうとする
良い先生は宇宙を何時も教えてくれる
良い生徒は宇宙を何時も感じている

今はもう社長や政治家や官僚たちが求める
数字と文字だけで捏造された文書を燃やせ！
生徒の前に布団を敷く時刻がきた
生徒と一緒に宇宙を描く時刻がきた

日の出に

遠い水平線の向うから
私の名前を呼ぶのは誰ですか
たった独りの叫び声でも明るく
ショパンのワルツのように軽い

あなたの声を眼で見るように
どこまでも続く三連音符のように
あなたの声は濡れた岩肌へ染み込み
うす黒かった山並が赤く転調する

あなたの声は樹木も変える
汚れた空気を肩に担ぎながら
灰色に濡れていた葉陰の中から
明日のことが気にかかる若葉が笑う

小さくなった過去が大地に落ち
けっして戻ることがない悔恨と
消えることがない記憶の二重奏
独りで砂浜にいるから二人になれる

あなたの声が私を呼ぶから
黙っていても沢山の存在が見える
砂丘の上の白い月に気づいたから
すべてが戻ってくるような気がする

III

再 生

山肌を削り 谷底へ運ぶ
曲線の稜線が直線になる
山桜を伐り 金属が並ぶ
揺れる色彩が単色に変わる

谷底を知らない住民たち
遠い町を逃れた現代の奴隷
消えた山肌に照葉樹が立ち
オリンポスの神々への敬礼

革命家のように

南の海に沈んだ古代の大陸のように
幻想のイメージでしかない小動物の命
ここは眠るためだけのマンションの住民の国
あざやかな夕陽を写していた雉の旅立ち

それでも谷底を知る無神論者の指に
揚羽蝶の翅が幽かに触れる季節が来た
今年も亡命して独りになった革命家のように
消えたはずの野生の遺伝子を捜していた

新 緑

見えない月桂樹の葉
四本の山ザクラとともに
伐り倒された心の母
ここは蹂躪に慣れた島国

パリ郊外の遠い風景に似て
なだらかな丘の稜線の記憶
遮るのは企業戦士たちの両手
楓の切株からは必死の新緑

四月の誓い

小さな丘にきれいに並ぶ四本の山ザクラ
五階建てマンションの権力に伐られた夜
それでも春の風が吹けば 誘われながら
絹でできたような淡い花びらを夢見ている

山ザクラの小枝が 優美な指揮棒のように
四月の風に揺れる姿が見られなくなっても
それでも辛うじて孤高に佇むコナラの巨木に
大空と大気と大地に流れる 連帯を誓う雲

結 婚

二人の両親の結婚記念日が同じ偶然に

二人の結婚式はパズルのように決まり
水が流れるような運命を縁という必然に
喜びはいつも人間が発見したルールの隣

私の母と妻は親しい関係の名前を現し
妻の父と兄は私の名前の両面を印し
ひとりでなければ二人になれないから
やがて二人の化身の娘たちは身一つから

高遠の空

白波が続く海岸線のような稜線に
タカトオコヒガンザクラの若葉が光る
桜雲橋おうんきょうを渡ると旅人の空が見える
大切なものだけを身に付けて行く国

あらゆる緑が山肌に浮かぶ伊那路
穏やかな春の霞が溶けた大空に
駒ヶ岳と宝剣山の白い額縁の頂に
勝利を限りないものにするVの頭文字

手紙

三年前に貰った手紙が抽斗から見付き
書いた人の文字を追って「しまった！」と思う
妻と別れ退職もした孤独な筆跡の強がり
そのうちに会って一杯やろうと結んでいる親友

怠惰な毎日であるとだけ書かれた皮相な手紙
それなら何時でも会えると何となく思いつづけて
返事も書かず電話もしなかった後悔の暗い闇
便箋の純白の部分を正確に読まなかった怠惰の果て

尊敬へのアイロニー

十二歳の私が尊敬した人は医者シュバイツァーだった
十五歳の私が尊敬した人は音楽家のベートーヴェンだった
二十歳の私が尊敬した人は文学者のヴァレリーだった
二五歳から尊敬するアランは六五歳の定年まで高校教師だった

医者と芸術家と教師は今でも肉眼で尊敬できるが
政治家と宗教家は文字の中でも尊敬できないでいる

遠い西洋のドイツ人とフランス人には尊敬できる人がいたが
身近なアメリカ人と中国人には尊敬できないでいる

尊敬する人は私が一生かかっても追いつけそうにない人
尊敬する人の山頂にはいくら頑張っても登れそうにない
それでも憧憬する乳房のような無私の心に触れたくなる人
尊敬する人は私とは遠い存在で決して親しくなれそうにない

芸術家は鑑賞家の言いなりにならない方が良いかもしれない
学校の先生は生徒と親しく戯れない方が良いかもしれない
政治家は有権者の我が儘を聞かない方が良いかもしれない
身近な人とは慣れ親しくしない方が尊敬されるかもしれない

五月の祭り

深い緑色の針のような新茶の葉が
ゆっくりと優しく湯の中で解ほどけた
冬の眠りから醒めた太陽の匂いが
ほろ苦い懐かしい味を漉していた

初めて指輪を嵌めた少女のように
一瞬の静寂を破ったのはあの旋律か
あるいは初めて酒を含んだ息子のように
五月の空は季節外れの針葉樹林か

男の子が初めて生れた新婚の家には
その子の名前を書いた大凧が揚げられる
赤石風おろしの風に乗って揺れる大凧は
地上の大人たちに守られて砂丘を見る

どこまでも続く白い海岸線からは
行き先を失った男たちの足跡が消える
大空に歴史を描いてきた時間の長さは
見ることから 自ら見たいと思うことに変える

言われるままに生きるのも一つの選択
何もしないでこうやって独裁者の国が生れた
今は自らやりたいと思う祭りの法被はっぴが行く
遠州には△やらまいか▽の精神が残っていた

青く澄んだ湖

母が倒れたと言う
救急車で運ばれたことを
私は夜の留守番電話で知った
入院している大学病院へ問い合わせる
最初はいないと言われる
二回目に問い合わせる
会計が済んでいるから帰ったと言う
三回目は電話番号を間違える
四回目に問い合わせる
本院の受付から東病院へ回され
看護婦さんらしい女性が出る
容態を聞いてみると
お医者さんに替わると言う
呼びに行っている声が遠くに聞こえる
若い声のお医者さんが出る
危険な症状らしい
△肺梗塞▽の病名を言われる
足にあった血栓が飛んで
左右の肺の入口を塞いでいると言う
血液の酸素量が低下しているから
酸素吸入を行っていると言う
血栓を溶かす点滴は
血管から出血しやすく
脳からの出血のリスクがあるらしい
この時私は仏様に祈れば
仏教徒に成っていただろう
イエス・キリストに祈れば
クリスチャンに成っていただろう
それでも私は祈らなかった
祈れば母はこの世にいないように感じた
祈らないことが私の祈りだった
こうして眠れない夜が始まった

考えては不可ないと思ったが
葬儀会場の場所のことを考えた
遠方から会葬に来る者たちのことを考えた

長い長い夜だった
私は母の顔を思い出していた
記憶の中の一番最初の顔を思い出していた
私は母の背中に負ぶさっている
母は七輪で秋刀魚を焼いている
煙を気にしながら
背中の私を気遣う気配が
私の遺伝子に刻まれたように残されている
今でも感じられる気遣い——
その気遣いが母を無私にした
犠牲だらけの結婚生活だった
化粧品が入った重い鞆を持ち
毎月靴を買い替えるほどに
歩き回る日々の姿が四三年間も続いた
戦前は日本舞踊も踊った箱入り娘は
戦後に結婚して夫の犠牲になり
子供たちの犠牲になり
化粧品会社の犠牲になり
戦争と政治と経済の犠牲になって
空気が抜けた萎れた紙風船のように
ベッドの中で横たわっている
安い六人部屋でよいと言って
看護設備の整った二人部屋へは
頑として移らないと言っていたらしい
看護師さんたちも困っていたらしい
私は承諾書にサインした
大正生れの七七年間の生涯が美しい
フランスの哲学者の言葉を思い出す

∧美は全てが悪徳ではない∨
美しいものは正しい
母の犠牲的献身の道は
現代女性たちには容認できない道だろう
若い彼女たちには悪徳ですらあるだろう
けれども母の生涯はベッドの中で美しい
美しいものは正しい
間違っているのは現代女性たちかもしれない
そんな反動的で不躰な誤解が生れても
不遜でないような錯覚に囚われたのは
母の瞳に青く澄んだ湖を見た時だった
湖上に七色の紙風船が飛んで行くのが映り
その果敢なように浮かぶ紙風船を
私は全身全霊の力を込めて膨らませていた

退 職

東名高速道路の事故から半年
二人が即死した大事故から奇跡的に助かった
二十歳の娘さんの脳の怪我は何とか治っても
それでも脳に水が溜まるから
頭部から胸までチューブを通して
磁力の調整で体外へ水を出さねばならない
チューブを皮膚に埋め込む手術が済んで
二十歳の娘さんは半年で退院した
リハビリを兼ねて大学へも登校した
何が起こるか分からないから

母親は何時も娘さんに付き添った
娘さんと教室へ這入って隣に座り
一緒に教授の授業を聞きながら
一緒に学生食堂へも通っている
大学三年生の娘さんは同級生と一緒に
どうしても来年の春に卒業したいと真顔で言う
母親は諦めた顔でちょっと笑った

周りの人は父親である同僚に休学を勧めたが
同僚は生きようとする娘さんの意志を尊重した
二か月が経ち 三か月が経った
事故で脳をやられたので
やはり勉強が難しいらしい
レポートを書くのもなかなか捗らない
母親との二人三脚の学生生活は
やがて母親の方が先に破綻した
父親である同僚の協力を求めた
同僚のセクションは予算関係の仕事だった
国会へ提出する書類を作成して
印刷局で毎年行われる入出張校正は
朝に開始されて終るのは翌朝の四時過ぎ
我が国の官僚制をぼやいてみても
二十歳の娘さんは一向に自立できずにいた
同僚は後進に道を譲ることにしたと
三十二年間の時の重さに耐えるように
少し不器用に笑顔を作って退職を口にした

笑 顔

自分の力では何も出来ないから
遠景のように見える虚無を忘れるために
卒業という義務を引き寄せる力
笑いは死にももの狂いの顔の隣に

白い肌に無感覚な物質への恐怖
うっすらと若い肌に透けるチューブに
国家よりも重い父親としての自負
笑いは運命に責任を転嫁しない退職者に

献 杯

父とは十八歳の時に別々に家を離れ
その儘二十六歳の十二月に亡くなり
思い出すのは敗戦後の果敢無い貧乏疲れ
一度も一緒に酒を吞まずに見た鎮守の森

岳父とは妻と結婚する年に初めて会い
八十七歳で亡くなるまでの乾杯の記憶

実の父との酒盛りが無かったことを気遣い
会えば男同士で何時も決っていた杯に沸く

今日は仏様に成るという四十九日の納骨で
暖かい三月の太陽がこんなにも長閑なのは
軽く口笛を吹いてご機嫌なあなたのように
桜の花びらのように滑らかに消えた顔の皺

入院が多かった幼い娘を連れて行った夏の海
やり場の無い無力さの日々が続いていたのに
穏やかに笑うあなたが教えてくれた家庭の意味
家族が仲良く海に這入れば苦しみも楽しみに

生前に延命治療は要らないと家族を気遣い
侍のようなあなたを偲んで集まった人々を前に
父よりも父親らしかったあなたの思い出に
感謝の言葉として今日はあなたのために 献杯！

あとがき

私は、詩を書くようになって気付いたことがあります。この世には二種類の間人がいます。例えば男性と女性がいます。大人と未成年者がいます。日本人と外国人がいます。そして、詩人と詩人でない間人がいることに気付きました。詩は感情の文学ですから、詩人は自分の感情を表現しようと努めます。表現することによって美と自由と永遠を手に入れようとします。感情という私的なものを大切にしながらも、複数の間人のための共有のものに変換させ変容させ表現しようとします。自分以外の何ものかのために、自らの人生を捧げる人に成ろうとします。従って詩人の道に終りはありません。終着駅のない信念の道を歩む覚悟をしている人である詩人が、結果や代償というものを求めないのもそのためです。詩人には目標や目的というものも相応しくありません。逆に、目標とか目的というものを求めないのが詩人です。何故なら、目標や目的はそれが実現すれば永遠でなくなるからです。その時、詩人は詩人でなくなります。

そんな風に考えている詩人は、歌人や俳人も含めて、現代の我が国に何人いるのでしょうか。譬え詩を創らなくても、そのような詩人の精神を持ち、そのような道を歩んでいる詩人もいる筈ですから、私には分かりません。詩作品を創らなくてもその生き方が詩人である人も多くいる筈です。それは信仰の道に似て、生涯を賭けるものになるでしょう。そして、詩人たちは自らの存在そのものによって、お互いが理解し合える時が必ずくると思っています。何故なら、詩の道を信じている者が詩人であると考えているからです。

この世には、詩人と詩人でない間人の二種類の間人がいます。前者の生き方は、後者の理解を超えて不可解な生き方に映るかもしれません。前者が使用する言葉も正確に理解されない時があると思います。そして、前者の生活における価値観も、後者のものと違ったものになるに違いありません。換言すれば前者の見る美や自由や永遠は、後者には絵空事であり酔生夢死のような生き方にしか見えないかもしれません。何故ならそれらは本来、自ら戦わないことを決意した間人にしか見えないものであるからです。詩人は戦おうとしません。詩人は、詩人でない間人と戦うこともありません。何故なら、戦えば美しくなくなるからです、自由でなくなるからです、永遠でなくなるからです。

「Ⅰ」は、戦後生れの私たちが全共闘世代とか団塊の世代と呼ばれながら、それでも時代を凝視し詩人として時代を生き証として、時代の幻影に寄せて書いたものです。「Ⅱ」は、私に影響を与えてくれた今は亡き芸術家たちの魂に捧げるために、愛する芸術家たちのために書いたものです。「Ⅲ」は、私の実生活を詩人の眼を通して創作したものであり、個人的感情を詩的表現によって情動や情熱の感情から情操という感情へ昇華させようとして、観想的な生活の中から書いたものです。なお、いずれも詩を創作するに当たり、言辞が所有する音感的側面についても玩味したつもりです。

私は決して詩形式に拘泥する者ではありませんが、現代詩における自由詩の弊害を安易に隠蔽せずに、あらゆる問題を色々と指摘すべきであり、様々な側面から議論した方がよいと考える者の一人です。今更言うまでもありませんが、それまでの伝統的な詩形式を放擲した自由詩は、アルチュール・ランボーのような言葉の天才が書き始めたものです。しかし、詩人は必ずしも天才である必要がないと思います。私は、誰もが自由に詩人に成って貰いたいと考えています。詩は決して天才のものではない筈です。そのように考えると、詩人と一体化した言辞自体よりも、言辞の意味やイメージを優先させている自由詩に付着する欠点を自然に解消する方法としては、如何なる詩人にも共通した形式美というものも有効に働くものと私は考えます。勿論、自由詩には詩の創作を誰にも可能にしている点など、多くの長所が存在しています。しかし、詩という表現形式を選択して創作する時には、守るべきものが必ずある筈です。守るべきルールというものがあつた筈です。ルールがあるから誰もが自由に通行することが出来ます。ルールという抵抗があるから自由になれます。例えば空気という抵抗があるから鳥たちが自由に大空を飛べるのに似ています。しかし、この逆説は現代詩人たちに余り理解されていないように思われます。

翻つて所謂〈自由詩〉について多くの現代詩人たちが理解している処は、右側通行も左側通行もない歩行者天国のように、出来る限りルールや制限を排除した世界での表現を最良と見做す詩のようです。従つて、それらは実生活上の義務を果さないで済む非日常化された休日の時ぐらいしか通行出来ないものになっているかの如くです。つまり詩が、非日常化された儘で生きた感情を基本とした生活から乖離していくか、或いは生活上の信念を忘却した陳腐で平板化された現実と一体化したり、諧謔に終始した表現傾向に分離されていきます。詩の言辞として本来の機能を持つ多様な伝達性が著しく退化して、やがて詩の表現として人間社会に通用しなくなるのではないのでしょうか。いや、その兆候は残念ながら既に、現代詩の世界において見受けられると思います。自由詩に限定した儘の偏狭な詩の世界では、やがて詩の固有性や独自性が稀薄になり、高い密度の表現が稀釈化されて散文化し、やがては孤高である筈の詩人の誇りまでも見失っていくのではないのでしょうか。詩の道を歩む者として、端倪すべからざるこのような事態を危惧するのは私の杞憂でしょうか。現代詩へのそのような矜持の思いも秘めて、主に二〇〇四年以後に創作した作品を一部加筆・修正して、自由詩と四行詩が共生する一冊の詩集に纏めてみました。

従つて本詩集は、私の詩の道を決定付けてくれる一つの道標でもあります。そして、このささやかな道標をお読み戴き、一人でも多くの方が、戦いや争いの感情を昇華させて放擲した詩の道を思い出す一つの契機となつて戴けるならば、私にとっては望外の喜びです。

本詩集を上梓するに際しては、私の第一詩集から手掛けて戴いている宿谷志郎氏に、この度もお世話になりました。衷心より深謝申し上げます。

二〇一〇年七月

たまプラーザ丘陵の寓居にて 高村昌憲

略歴

高村昌憲（たかむら まさのり）

略 歴

一九五〇年 静岡県浜松市生まれ

一九七四年 明治大学文学部卒業

一九七七年 詩集『螺旋―新しき回帰―』（A & E）

一九八四年 翻訳『アランの「エチュード」』（創新社）

一九九六年 個人誌『パープル』創刊（三九号まで編集・発行）

二〇〇四年 詩集『六つの文字』（A & E）

評論集『現代詩再考』（A & E）

二〇〇五年 翻訳・アラン『初期プロポ集』（土曜美術社出版販売）

二〇〇七年 共同編著『齋藤 忌 詩全集』（土曜美術社出版販売）

翻訳・ジャン・ヴィアル『教育の歴史』（文庫クセジュ917・白水社）

二〇一〇年 詩集『七〇年代の雨』（A & E）

二〇一二年 エッセイ集『アランと共に』（電子書籍・ブクログのpapier）

二〇一三年 翻訳・アラン『一ノルマンディー人のプロポ1』（電子書籍・ブクログのpapier）

翻訳・アラン『文明国の戦争で真の原因になるもの』（電子書籍・ブクログの

papier）ほか

所 属 日本詩人クラブ、日本仏学史学会ほか

神奈川県川崎市在住

E-mail <masanot@b01.itscom.net>

七〇年代の雨

<http://p.booklog.jp/book/47036>

著者：高村昌憲

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/47036>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/47036>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.